

障害者支援施設における自閉症児者への レクリエーション支援に対する生活支援員の認識

松 山 郁 夫

Recognition of Residential Workers about the Activity Support for the Recreation to Persons with Autism in the Facility for Disabled

Ikuo MATSUYAMA

要 旨

障害者支援施設において自閉症児者の生活の質を高めるうえで、その独特な障害特性や行動特徴を踏まえて、レクリエーション活動を支援することが求められる。このため、生活支援員が自閉症児者へのレクリエーション活動に対する支援を、どのように認識しているのかを明らかにする必要がある。本研究の目的は、障害者支援施設における自閉症児者へのレクリエーション支援に対する生活支援員の認識を検討することとした。生活支援員を対象として、自閉症児者へのレクリエーション支援に対して意識する度合いを問う、独自の質問を記載した質問紙票による調査を実施した。得られた424名からの有効回答を分析した結果、第1因子「他者との交流の促進」、第2因子「充実した活動の促進」、第3因子「知的発達の促進」、第4因子「自己肯定感向上の促進」が抽出された。これらの因子は生活支援員が自閉症児者へのレクリエーション活動を支援する際の視点と考察した。

Key words：自閉症、レクリエーション支援、生活支援員、障害者支援施設

1. はじめに

自閉症について、米国精神医学会（American Psychiatric Association：APA）の「精神障害の診断・統計マニュアル第4版」（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 4th Edition：DSM-IV）では、自閉性障害として、①相互的対人関係における障害、②意志伝達の障害、③行動・興味及び活動の限定された反復的で常同的な様式、の3領域における特徴が生後3年以内に発現する発達障害と定義されている¹⁾（APA, 1994）。また、同医学会の最新版である第5版（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 5th edition：DSM-5）では、Autism Spectrum Disorderを「社会的コミュニケーションと社会的相互作用における持続的な欠損」と「行動、興味、活動の限局的かつ反復的なパターン」の2

つの障害特性を持つ神経発達障害としている（APA, 2013）²⁾。

自閉症児者は、その障害特徴のために日常での同世代の集団活動に参加する機会が乏しい。集団活動に参加したとしても、活動の中で対人関係の失敗経験が蓄積し、その体験が集団参加への回避や拒否に発展することもあるとされている（井上 2010）³⁾。しかしながら、自閉症のある成人を対象とした QOL（生活の質）とストレスに対する余暇プログラムを実施すると、QOL における満足度、独立性、コンピテンス、および社会的相互作用の向上に関して、かなりの効果があったとの報告がなされている（Garcia-Villamizar, Dattilo, 2010）⁴⁾。

これらより、自閉症児者の支援者には、独特な障害特性や行動特徴を踏まえながら、余暇プログラムのなかでも参加者が能動的に参加する場面が多いレクリエーション活動を通して、その社会適応力を高めていくことが求められる。

日本の旧体系における知的障害者更生施設は、2006年4月に施行された障害者自立支援法第5条に定義される「障害福祉サービス」の中で、主に「施設入所支援」として位置づけられ、「障害者支援施設」とされた。2013年4月（一部は2014年4月）に「障害者自立支援法」から「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律（障害者総合支援法）」へと移行した。これ以降、障害支援区分によって、障害の多様な特性その他の心身の状態に応じて必要とされる標準的な支援の度合いを総合的に示すようになった。なお、障害者支援施設には、自閉症児者に対する療育による支援を行っているところもある。

自閉症には言語や対人コミュニケーション等に関する独特な障害が認められる。このため、障害者支援施設の生活支援員は、自閉症児者の生活全般に対して広く目を向けながら支援を行っている。その際、自閉症児者の生活状況を心理状態、日常生活技能、および社会適応技能の側面から捉えようとしている（松山 2012）⁵⁾。したがって、生活支援員は自閉症児者の生活の質を向上させるために、レクリエーション活動を充実させるように図っているものと考えられる。

このようなことから、障害者支援施設において生活支援員が自閉症児者へのレクリエーション活動に対する支援を、どのように捉えているのかを明らかにすることが求められる。それによって、自閉症児者がレクリエーション活動の場に安心して参加し、他者との交流も容易になるような支援がなされ、QOL（生活の質）の向上に繋がるものと考えられる。このため、本研究の目的は、障害者支援施設の生活支援員における自閉症児者へのレクリエーション支援に対する認識を明らかにすることとする。

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象と調査項目

本研究では、障害者支援施設の生活支援員を対象として、自閉症児者へのレクリエーション支援に対して意識する度合いを問う、独自の質問を記載した質問紙調査票による調査を実施した。

調査対象は、全国自閉症者施設協議会に加盟している入所タイプの障害者支援施設（旧体系における知的障害者更生施設）において、青年期・成人期の自閉症者の生活支援を行っている生活支援員とした。無記名で独自に作成した質問紙調査票を郵送により配布し、回収した。合計463名から回答があった。それらのうち、自閉症に関わった年数が1年以上あり、主に関わっている対象者が知的障害のある青年期と成人期の自閉症で、全質問項目に回答している424名の質問紙調査票を有効回答とした（有効回答数を総回答数で除して算出した有効回答率については91.6%）。同時に分析対象とした。

調査項目については、回答者のプロフィールに関する性別、年齢、職種、自閉症に関わった年数、支援している対象者のライフステージと障害種類、所属する施設の種類の種類を付記した。

分析対象者のプロフィールは次の通りであった。

性別は男性220名（51.9%）、女性204名（48.1%）、年齢は20歳から78歳で、平均年齢36.7歳（標準偏差10.4）であった（以降、標準偏差をSDと記述する）。自閉症に関わった年数は1年から35年で、平均7.5年（SD 6.3）であった。

2. 調査期間と調査方法

調査期間は、平成27年11月15日より平成28年1月15日までの約2か月間とした。

調査方法は、全国自閉症者施設協議会に加盟している入所タイプの障害者支援施設66か所に、独自に作成した質問紙調査票を郵送にて配布し回収する方法にて実施した。35か所（送付した施設の53.0%）から回答が得られた。なお、倫理的配慮として、質問紙調査票を郵送した施設に対して、調査の主旨とデータの分析に際しては、すべて数値化するため施設名は一切出ないことを文書で説明し、回答をもって承諾が得られたこととした。

3. 調査項目の作成手順

本研究で使用する質問紙調査票の作成にあたっては、障害者支援施設の生活支援員10名に対して、配布した質問紙調査票に書いてある「普段、自閉症児者へのレクリエーションを支援する際、気になっていることを思いつく範囲で箇条書きにより、記入してください。」との文章を読み、その後、同質問紙調査票の欄に記入してもらった。得られた回答のうち複数回答のあった内容をすべて使用して、23項目の質問項目を作成した。

その際の作成例として、「他者と関わることを楽しむようにする」と「他者と関わることを楽しめるように支援すること」の回答を「6. 他者との関わりを楽しむこと」、「活動内容を把握できること」、「活動内容がわかるように支援すること」を「8. 活動内容を把握すること」、また、「皆と一緒に過ごすこと」、「集団で落ち着いて活動をすること」、「集団の中にいても、安定できること」の3つの回答を「20. 集団のなかで安定すること」とした。なお、自閉症児者へのレクリエーション活動を支援する際、各ケースの状態に応じてきめ細かく行われるような配慮が求められる。したがって、回答に含まれている意味内容を大きく括らないようにしながら質問項目の作成を行った。

自閉症児者へのレクリエーション支援に対して、意識する度合いを問う独自の23項目の質問項目における回答は、「まったく気にしていない」（1点）、「あまり気にしていない」（2点）、「どちらとも言えない」（3点）、「ある程度気にしている」（4点）、「かなり気にしている」（5点）までの5段階評価とした。なお、各質問項目について、等間隔に並べた1～5までの数字のうち、あてはまる数字に○を付けるようにした。

4. 分析方法

以上の質問項目への回答に対する分析方法として、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。次に、各質問項目についてPromax回転を伴う主因子法による因子分析を行った。また、因子分析によって得られた各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を求めた。その際、因子ごとの項目数が異なるため、算出された平均値を項目数で除したものを平均値として示した。さらに、各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を用いて、各因子間で平均値に差があるかどうかを検討するために、対応がある場合の一元配置分散分析を行った。加えて、各因子のCronbachの α 係数を求め、各因子別、及び全体としての内的一貫性を有するかどうかの検証も行った。なお、統計処理には、IBM SPSS Statistics 22を使用した。

Ⅲ. 結 果

自閉症児者へのレクリエーション支援に対して意識する度合いを問う独自の23項目の質問項目について、各項目の平均値・標準偏差については表1の通りであった。平均値の最小値は2.05 (SD. 985)「9. 他者と競争すること」で、最大値は4.42 (SD. 710)「23. 楽しい時間を過ごすこと」であった。これら23項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.91であった。また、Bartlettの球面性検定では有意性が認められた(近似カイ2乗値 4785.562 $p < .01$)。このため、23項目については因子分析を行うのに適していると判断した。

これら23項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は8.04、2.84、1.60、1.13、1.01……というものであり、スクリープロットの結果からも4因子構造が妥当であると考えられた。そこで、4因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。

その結果、十分な因子負荷量を示さなかった3項目を除外して、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。さらに、十分な因子負荷量を示さなかった1項目を除外して、再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の因子パターンは表2の通りであった。回転前の4因子で19項目の全分散を説明する割合は63.26%であった。なお、これら19項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.89であった。また、Bartlettの球面性検定では有意性が認められた(近似カイ2乗値 3981.54 $p < .01$)。

各因子のCronbachの α 係数を求めたところ、第1因子0.87、第2因子0.82、第3因子0.83、第4因子0.84であり、全項目で0.90との値を示したことから、各因子別に見ても、全体としても、内の一貫性を有すると判断された。

第1因子は、「3. 集団活動を楽しむこと」、「2. 他者と協力すること」、「6. 他者との関わりを楽しむこと」、「15. 皆と仲良くすること」など、主として、自閉症児者がレクリエーション活動において、他者と交流することを重視した内容であったため、「他者との交流の促進」と名づけた。

第2因子は、「12. 気分転換をすること」、「13. 活動を楽しむこと」、「23. 楽しい時間を過ごすこと」、「5. ストレスを発散すること」など、主として、自閉症児者のレクリエーション活動が充実することを重視した内容であったため、「充実した活動の促進」と名づけた。

第3因子は、「7. 想像力を高めること」、「11. 創造力を高めること」、「22. 言語能力を高めること」、「14. 集中力を高めること」など、主として、自閉症児者がレクリエーション活動を通して知的発達を促すことを重視した内容としていたため、「知的発達の促進」と名づけた。

第4因子は、「18. 達成感を得ること」、「19. 自信を持つこと」で、自閉症児者がレクリエーション活動を通して自己肯定感を高めることを重視した内容であったため、「自己肯定感向上の促進」と名づけた。

因子別の平均値は、第1因子3.51 (SD 0.76)、第2因子4.08 (SD 0.56)、第3因子2.91 (SD 0.83)、第4因子3.77 (SD 0.89)であった。

各因子間の平均値について対応がある場合の一元配置分散分析を行った結果、4因子の平均値間には有意差が認められた(表3)。さらに、各因子の平均値に対して多重比較を行った結果、各因子間のすべてにおいて有意差が認められた。このため、障害者支援施設の生活支援員は、自閉症児者へのレクリエーションを支援する際、第2因子「充実した活動の促進」、第4因子「自己肯定感向上の促進」、第1因子「他者との交流の促進」、第3因子「知的発達の促進」の順に関心を向けていることが示唆された(表4)。

表 1. 自閉症児者へのレクリエーション支援に対して意識する度合いについての平均値と標準偏差 n=424

質問項目	平 均	標準偏差
1. 雰囲気を楽しむこと	4.17	.747
2. 他者と協力すること	3.26	1.000
3. 集団活動を楽しむこと	3.37	1.052
4. 活動に興味を持つこと	4.06	.779
5. ストレスを発散すること	3.79	.859
6. 他者との関わりを楽しむこと	3.34	.999
7. 想像力を高めること	3.00	.988
8. 活動内容を把握すること	3.79	.898
9. 他者と競争すること	2.05	.985
10. 人間関係を築くこと	3.23	1.155
11. 創造力を高めること	3.03	1.012
12. 気分転換をすること	4.14	.764
13. 活動を楽しむこと	4.34	.699
14. 集中力を高めること	3.06	1.058
15. 皆と仲良くすること	3.22	1.101
16. 落ち着いて過ごすこと	4.06	.847
17. 緊張感を解くこと	3.75	.909
18. 達成感を得ること	3.78	.944
19. 自信を持つこと	3.76	.966
20. 集団のなかで安定すること	3.72	.958
21. 活動に参加できること	4.06	.800
22. 言語能力を高めること	2.56	1.011
23. 楽しい時間を過ごすこと	4.42	.710

表 2. 自閉症児者へのレクリエーション支援に対して意識する度合いについての因子分析結果 n=424

質問項目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
第 1 因子「他者との交流の促進」				
3. 集団活動を楽しむこと	.896	-.036	.026	-.096
2. 他者と協力すること	.802	-.108	.068	.017
6. 他者との関わりを楽しむこと	.721	-.011	.137	-.020
15. 皆と仲良くすること	.691	.044	.152	-.081
20. 集団のなかで安定すること	.424	.106	.078	.175
1. 雰囲気を楽しむこと	.415	.369	-.200	.093
第 2 因子「充実した活動の促進」				
12. 気分転換をすること	-.165	.835	.095	-.128

13. 活動を楽しむこと	.068	.759	-.190	.105
23. 楽しい時間を過ごすこと	.153	.754	-.179	-.094
5. ストレスを発散すること	-.169	.689	.273	-.144
16. 落ち着いて過ごすこと	-.047	.462	.140	.044
17. 緊張感を解くこと	-.027	.417	.163	.201
4. 活動に興味を持つこと	.112	.415	-.001	.219
第3因子「知的発達の促進」				
7. 想像力を高めること	.119	.056	.713	.000
11. 創造力を高めること	.131	.081	.656	-.012
22. 言語能力を高めること	.252	-.107	.589	-.035
14. 集中力を高めること	-.016	.005	.572	.225
第4因子「自己肯定感向上の促進」				
18. 達成感を得ること	-.061	-.082	.022	.884
19. 自信を持つこと	-.028	.011	.070	.847

表3. 自閉症児者へのレクリエーション支援に対して意識する度合いについての分散分析の結果

区 分	平方和	自由度	平均平方	F 値
レクリエーション支援	311.842	3	103.947	323.944*
被調査者	588.576	423		
誤 差	407.198	1269	.321	
全 体	1307.616	1695		

*p < .05

表4. 自閉症児者へのレクリエーション支援に対して意識する度合いについての多重比較による各因子の平均値の差

	第2因子「充実した活動の促進」	第3因子「知的発達の促進」	第4因子「自己肯定感向上の促進」
第1因子「他者との交流の促進」	.568*	.599*	.259*
第2因子「充実した活動の促進」		1.167*	.308*
第3因子「知的発達の促進」			.858*

*p < .05

Ⅳ. 考 察

1960年代に、自閉症の原因を言語認知障害とする器質因論が提起された（Rutter, 1967）⁶⁾。以降、自閉症における対人関係障害は言語認知障害の結果として生じるとの見方がなされた。しかしながら、社会情緒的発達と言語認知的発達の関連性については、これまで考えられてきたようには単純化できないとされている（Dawson, 1989）⁷⁾。さらに、自閉症の療育において、援助者と被援助者との人間関係もしくは、交流を進める療育方法の必要性を重く捉えたとの見解がある（石井 1990）⁸⁾。このような知見を踏まえると、第1因子「他者との交流の促進」は、生活支援員が自閉症児者の社会情緒的発達を重視して、レクリエーション活動において、他者との交流を促すような支援を心がけていることを表しているものと考えられる。

自閉症児については、行動面、社会性の障害特性によって学校生活上の困難をきたすことが多いとされている（内山 2009）⁹⁾。社会において適応行為を増やすためには、周囲からの明確な指示がなくても適切な行動の生起と維持のために、その構成要素である下位スキルを遂行するセルフ・マネジメント行動を獲得する必要性も指摘されている（Koegel, Parks, 1996）¹⁰⁾。このように、自閉症児者の日常生活における活動が自律した豊かなものになるような展開が求められている。そのため、第2因子「充実した活動の促進」は、生活支援員が自閉症児者への充実したレクリエーション活動を促進するように心がけていることを表しているであろう。

発達的に見た自閉症の認知障害は発達の遅滞の障害として現れ、加齢とともに変化する。認知の構造は、自閉症という特徴を持ちながらも一人ひとり異なった発達をし、発達の過程の中で修復されたり不均衡さが目立ってきたりすると指摘されている（太田・永井 1992）¹¹⁾。認知については、ある対象や事象の意味を判断する精神機能であるため、社会生活をしていくために不可欠な文化的営みと捉えられる。第3因子「知的発達の促進」は、生活支援員がレクリエーション活動を支援する際、自閉症児者の知的発達を促進するように心がけていることを表していると言える。

自閉症児者における主要な課題については、言語とコミュニケーションの獲得と指摘されている（Wetherby, Prizant, 1999）¹²⁾。自閉症があると、要求を言葉で表現できても目線が合わず、適切な身振り動作を伴わない、覚えた言葉を日常生活の中に応用して使うことが難しい、抽象的な概念や事物の関連性を理解したり使ったりすることが難しい、および言葉や文章が言えても意味のある会話を作ることができず、一方的な話題になってしまう等のコミュニケーションスキルに困難さを持つ（Richman, 2001）¹³⁾。自閉症はコミュニケーション障害を主症状とし、対人関係形成に著しい困難を示すため、周囲からの好意的な関わりが少なくなり、自己を肯定的に捉えることに困難をきたすものと窺える。このため、第4因子「自己肯定感向上の促進」は、生活支援員がレクリエーション活動において、自閉症児者が自分自身に対して肯定的に捉えられるような働きかけを心がけていることを表しているものと判断される。

障害者支援施設の余暇時間に関して、生活支援員は、自閉症者の意思を尊重しながら余暇活動を楽しむような配慮をしている（松山 2012）¹⁴⁾。障害者支援施設において生活支援員は、集団生活を営む自閉症児者が自律して生活でき、その生活が豊かなものになるような支援を心がけていると考えられる。自閉症児者へのレクリエーション活動を支援する際、充実した活動が行われることで、自己肯定感が高まり、情緒の安定に繋がる。自閉症児者が情緒的に安定すると、他者との交流を促し、安定した日常生活を営めるようになる（松山 2011）¹⁵⁾。安定すると学習活動が容易になるため、言語等の認知能力も高まり、知的発達がなされるものと予測される。このようなことから、障害者支援施設の生活支援員は、自閉症児者へのレクリエーション支援に対して、第2因子「充実した活動の促進」、第4因子「自己肯定感向上の促進」、

第1因子「他者との交流の促進」、第3因子「知的発達促進」の順に関心を向けているものと推察される。

自閉症児者へのレクリエーション活動を支援する際、「充実した活動の促進」、「自己肯定感向上の促進」、「他者との交流の促進」、「知的発達促進」の視点から活動内容を案出して働きかけることを通して、自閉症児者の生活の質を高めることが求められる。また、自閉症児者へのレクリエーション活動を、これらの4つの視点からバランスよく支援していく必要があると考えられる。

現在、自閉症児者には、その社会適応力を高め、地域において就労等を含めて少しでも自立した生活ができるようになることが求められている。今後、自閉症児者の日常生活をより豊かなものにしていくために、障害者支援施設の生活支援員における自閉症児者へのレクリエーション支援に対する捉え方を、日々のレクリエーション活動にどのように役立てていくのかを検討し、その生活の充実に必要な支援や配慮を明らかにすることが課題となる。

V. 結 論

本研究では、障害者支援施設の生活支援員における自閉症児者へのレクリエーション支援に対する認識を明らかにすることとした。生活支援員は、自閉症児者へのレクリエーション支援に対して、「充実した活動の促進」、「自己肯定感向上の促進」、「他者との交流の促進」、「知的発達促進」の視点から捉え、この順に関心を向けている。また、生活支援員における自閉症児者へのレクリエーション支援の捉え方を、その日常生活をより豊かなものにしていくためにどのように役立てていくのかを検討し、その生活の充実に必要な支援や配慮を明らかにすることが課題となる。以上が考察された。

【引用文献】

- 1) American Psychiatric Association. Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 4th Edition. Washington, D. C. 1994 高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸訳 DSM-IV 精神障害の診断・統計マニュアル 医学書院 1996
- 2) American Psychiatric Association. Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 5th Edition. Washington, D. C. 2013
- 3) 井上雅彦 発達障害のある子どもが集団のルールで動けるために 児童心理 63(18) 金子書房 100-105 2010
- 4) García-Villamisar, D. A., Dattilo, J. Effects of a leisure program on quality of life and stress of individuals with ASD. Journal of Intellectual Disability Research. 54(7) 611-619 2010
- 5) 松山郁夫 自閉症者の生活状況に対する生活支援員の捉え方 佐賀大学文化教育学部研究論文集 17(1) 111-118 2012
- 6) Rutter, M. Early childhood autism, London: Pergamon press, 1967
- 7) Dawson, G. (Ed.) Autism Nature, diagnosis, and treatment. New York, Guilford 1989 野村東助・清水康夫監訳 自閉症—その本態、診断および治療 日本文化科学社 1994
- 8) 石井哲夫 受容的交流療法の立場から：VI「自閉症に対するアプローチの統合は可能か」 教育心理学年報 30 21-22 1990
- 9) 内山登紀夫監修 安倍陽子・諏訪敏明編 こんなときどうする？発達障害のある子への支援—小学校— ミネルヴァ書房 8-9 2009
- 10) Koegel, R. L., Koegel, L. K., Parks, D. R Teach the individual model of generalization - Autonomy Through Self-management -. Koegel, R. L., Koegel, L. K. (Eds). Teaching Children with Autism. - Strategies for initiating Positive Interactions and Improving Learning Opportunities -. Paul H. Brookes. 1996
- 11) 太田昌孝・永井洋子編著 自閉症治療の到達点 日本文化科学社 1992
- 12) Amy M. Wetherby, Barry M. Prizant, Enhancing Language and Communication Development in Autism: Assessment and Intervention Guidelines. Berkell, Z. Autism: Identification, Education, and Treatment Second Edition LAWRENCE

ERLBAUM ASSOCIATES. 141-174 1999

13) Richman, S. Raising a child with autism A guide to applied behavior analysis for parents Jessica Kingsley Pub 2001

14) 松山郁夫 障害者支援施設における自閉症者への余暇支援のあり方—生活支援員に対する意識調査を通して— 福祉研究 104 58-65 2012

15) 松山郁夫 青年期・成人期の自閉症者に対する生活支援の有効性—旧体系における知的障害者更生施設の生活支援員に対する意識調査を通じて— 福祉研究 103 90-98 2011

【謝 辞】

調査に際し、自閉症児者の生活支援を行っている障害者支援施設の施設長と生活支援員の皆様にご協力いただきました。感謝申し上げます。